

2020年度事業計画 (2020年4月～2021年3月)

学校法人 東洋英和女学院

(はじめに)

本学院は、キリスト教（プロテスタント）の信仰と聖書の教えに基づき、建学の精神である「敬神奉仕」に沿った、人間形成を重んじる学校教育を行っています。

学院創立136年目にあたる今年も、幼稚園から大学院に至る総合学園として教育の一層の充実を図り、私どもへお寄せ頂くご期待にお応えしていくよう、教職員一同、力を尽くしてまいります。

2020年度の事業計画は、次のとおりです。

(目次)

1. 各部の教学計画
2. 各部の環境整備計画
3. 学院全体の管理運営計画

1. 各部の教学計画

(大学・大学院)

《大学》

東洋英和女学院大学は、キリスト教による人間形成を重んじ、学院の建学理念である「敬神奉仕」の精神を現代社会において具体的に実現するために、礼拝・学内のキリスト教に基づく諸活動を大切にしている。大学は2019年度に開学30年を迎えたが、現所在地に残留の上、所要の投資を行い、ソフト・ハード両面で今後の発展を期するとの学院基本方針に従って、長期的行動指針（Next30）を構想した。その初動となる第1次5カ年計画（2020年～24年）は、改正私立学校法の求める中期計画の期間と符合するもので、当該中期計画は、2016年に実施された大学基準協会の第2期認証評価において指摘された諸課題を踏まえ策定されている。とりわけ重視しているのは、大学の教育研究活動の「質」を確認・保証し、「学生の学修成果」の水準等を恒常的・継続的に保証するという、いわゆる内部質保証を明示することである。

2020年度においては、この内部質保証における取り組み状況や学修成果を定期的に分析・評価し、改革・改善・向上に資する実効的なシステムの構築に注力する。すでに大学においては、学生に対する各種アンケートやスキル測定、意識調査等の学修成果測定に活用可能な情報ツールを保持し、運用しているが、これらを改めて整理・整備する。その上で全学的なディプロ

マ・ポリシーを前提とした課題および目標を設定し、これらのツールを有機的に結節させて目標の実効的な達成に向けたシステムの構築に努める。また、前述の第2期認証評価で指摘された諸課題への取り組みに際し、2020年7月までに改善報告書を大学基準協会に提出するものと定められているため、その作成作業にあたりつつ、これを2024年に予定されている第3期認証評価に向けての学内体制整備の初動と位置付け、本格的な資料作成の準備を進める。

教学マネジメントの点検と改善とを目指した上記のようなソフト面での事業推進と同時に、ハード面では耐用年数に限界を迎えつつある学内諸施設の喫緊の補修に努めつつ、その抜本的な刷新に備えて現状の客観的把握を進める。

また、既存の「村岡花子記念講座」等で実績を上げている生涯学習センター・大学院と東京都港区との包括連携協定の前例に鑑み、大学と横浜市緑区との同様協定の締結に向けた調整を進める。大学は、これら地域行政とのつながりを、社会連携・社会貢献の重要な手段と位置付け、建学理念「敬神奉仕」の発信を目的とした諸種の対外的広宣教育活動を体系的に展開すべく努める。これら一連の対外発信事業が、建学理念に照らして適切か、諸事業間の整合が図られているか、事業運営や手続き等の責任主体は明確かなどを検証する枠組みを構築し、大学の社会連携・社会貢献のさらなる充実に努める。

《大学院》

大学院は、2020年度から新カリキュラムでの教育を開始する。同時に他大学院との単位互換制度もスタートさせ、教育・研究の質の向上を目指す。両研究科ともに受験生の確保が大きな課題であり、新たなニーズを掘り起こすための広報活動を展開し、学生数の増加を図っていく。

人間科学研究科では、人間科学領域死生学関連分野が上智大学大学院実践宗教学研究科死生学専攻との単位互換制度を開始する。臨床心理学領域では、公認心理師制度の定着に伴う社会人受験生の減少に対応し、学部新卒者確保のため甲南大学からの推薦入学を導入する。幼児教育・発達臨床学領域は、幼稚園教諭1種免許保持者以外にも門戸を広げ、保育者以外の受験生を広く受け入れる。

国際協力研究科は、早稲田大学大学院社会科学研究科との単位互換制度を開始する。新たにサステイナブル国際協力コースと国際政治経済・地域研究コースを設置し、大幅に刷新したカリキュラムをスタートさせる。新カリキュラム導入に伴い、職業実践力育成プログラム（BP）を文部科学省に再申請する。

（中学部・高等部）

建学の精神である「敬神奉仕」を基盤に据え、中高6年間を通じて「敬神奉仕の実践者」を育成する。昨年度から再構築したディプロマ・ポリシー、

生徒が目指すべき姿として「他者のために、なすべきことを自ら考え、行動することができる女性」を掲げている。そのために育成すべきものは「他者理解と自己理解」である。これらを育成するために全てのカリキュラムを通じて教育活動を行う。その根底には揺るぎない基盤であるキリスト教教育がある。毎朝の礼拝や聖書の授業、修養会等の行事を通じて人間性の涵養を図り、神と自分の縦軸の関係性をしっかりと身につけさせたい。

この基盤の上に、3つの特徴あるカリキュラム——①国際性を養う、②タラントに気づく、③感性・教養を磨く——を重層的に展開する。特に今年度は、「他者のために自分は何ができるのか？」というタラント発見と開発を導くために、教科教育の中で評価方法の研究を進める。これまで中心であったコンテンツ・ベースの教育（知識や技能を身に付けることが狙い。テスト得点で評価）からコンピテンシー・ベースの教育（授業を通してどのような力がついたかを指標で評価）に徐々にシフトし、「自立した学習者」の育成を目指す。授業のさらなる研鑽を進め、読解力向上を中心とした基礎学力定着の上に、主体的かつ協働的な学びの実践を目指す。方策のひとつとして、高等部生全員が持つ個人PCの活用により、ポータルサイト利用を通じた振り返りと情報共有、および授業での活用を図る。

現在検討中の高等部「総合探究」を段階的に実施し、課題研究で物事をより深く考え、学ぶことの意味と必要性についての自覚を養う。地球規模での課題に対してSDGsをテーマとして取り上げ、「敬神奉仕の実践者」としての地球市民の育成を目指す。中学部「総合学習」はPBL（問題解決型学習）も行い、グループワークやプレゼンテーションを通じて、対話力や表現力を養い、社会に対する視野の拡大と課題探究の基礎を築き、高等部教育に繋げていく。

また、今年度から生徒会担当委員会と生活指導委員会を「生徒指導委員会」に統合し、学校生活の中での生徒の自治活動の活性化を導きたい。これまでも行事運営や部活動運営を通じて、人との関わりの中での自己実現、集団の中での責任と他者尊重を育成してきたが、2022年から成人年齢が18歳に引き下げられることを視野に入れた社会参画意識の育成を目指す。

その他にも、これまでどおり高い評価を得ている英語教育のさらなるバージョンアップのための研究に取り組む。また短期留学や海外研修に加えて、海外協定校との姉妹校提携や新規協定校開拓を模索し、より実践的な国際教育プログラム構築に着手したい。小学校5・6年生の英語必修化に伴い、中学から入学してくる生徒たちの英語レベルがますます多様化し、充実した英語教育を求めて入学してくることが予想される。また、本学院小学部の英語教育もさらなる充実が図られるものと思われる。これらの状況に対応するため、小学部の英語科との連携を一層密にし、教材、環境の整備が急がれる。

(小学部)

朝の賛美・祈りに始まる学校生活の中で、様々な形をとって聖書の言葉が

伝えられ、日々児童たちはあふれんばかりの神の愛と恵みを浴びている。「敬神奉仕」の精神の具現化を、変わらず教育の第一義とし、いただいた愛と恵みを用いて、自分と他者を愛することができるように導いていく。そのために今年度は特に、誰もが神により造られた唯一で、他に類のない「ユニークなわたし」であることに気づかせるよう努める。

教科教育においては、各教科で学びが喜びにつながる教育内容を目標とし、そのための手段のひとつである「小学部ならでは」の ICT の活用の研究を継続する。そして受け身ではなく、疑問・興味・関心を持たせることを動機づけとした学びを進める。同時にユニークな存在である一人ひとりの、固有の考え、ペースが生かされることを大切にし、他と同調しなくてもいいのだという自信を与えたい。

3年目となる「小さいかご活動」をさらに充実させ、ゲストティーチャーを招いての特別授業なども増やし、自分と同様にユニークな存在である「隣人」についての学びを深め、行いをもって「隣人」を愛することを伝えていく。

さらに伝統的に特色ある英語科、芸術系、実技系各教科の充実を図り、ユニークな個々の力を伸ばしていく。また回を重ねますます意義を深めている韓国の姉妹校、梨花女子大学附属初等学校との交流を含む国際教育の推進を図る。

運動会、学芸会、コンサート、夏期学校、修学旅行など年間の様々な行事をさらに充実させ、児童一人ひとりの生き生きとした取り組みを全力で支える。また固有の課題を抱える一人ひとりに寄り添い、笑顔で日々が過ごせるように、教員間の連携を深め、養護教諭、カウンセラー、管理職が関わる教育相談体制をさらに充実させていく。

同時に、未来の小学部の教育を創り上げるための中長期将来計画を系統立てて策定するよう努める。

(東洋英和幼稚園)

2019年10月より幼児教育無償化が実施され、幼児教育が教育の始まりとしても重要な機関として位置づけられてきている。社会生活の希薄化や家族形態の変化、情報の氾濫など様々な問題があるが、そのような社会意識の変化の中でも、本園では学院の建学の精神「敬神奉仕」を心にとめ、キリスト教保育を行うことは変わることがない。幼稚園に関わる者が、神に愛されていることを感じ、集団の中で個性を發揮し、互いに認め合い、支え合う姿勢を持つことが望まれる。園児、保護者ともに交流する機会を設けるなどの工夫により相互理解を深め、皆で子どもの成長を見守る意識を再確認し、協力体制を築いていく。

子どもの実態を踏まえ、行事の持ち方や保育の在り方を継続して検討する。

個々の成長と合わせ、各クラスの特徴を活かした保育の実現のため、教職

員で情報を共有し、協議し教育の充実に努める。保育者は専門性の向上を目指す。

緊急対応について園児の安全を第一に考え、迅速に対応できるよう教職員、保護者が共通理解をし、協力体制を強化する。

各部との一層の連携を図り、種々の情報の共有に努める。さらに一貫教育の学院として子どもの育ちを連続して支える方法を継続し検討していく。

(大学付属かえで幼稚園)

学院とのつながりの中、地域に根差す幼児教育の場・保育の場、子育て支援の場、そして保育者養成の場として、キリスト教に立っての教育（保育）に努め「礼拝のある日常」を大切に守る。また落ち着いて深く取り組む遊びの中で生まれる子どもの自発性・想像性・創造性・社会性・自律性などを支えるとともに、一人ひとりの生活の力を導く。

かえで幼稚園の保育を深く願う保護者もいる一方、少子化・女性の就業・保育園こども園の激増・母親の意識の変化等により園児数は減少している。「幼稚園」をめぐる現実をとらえつつ、規模を小さくしても本園のキリスト教に根差した理念・特色・豊かな教育・保護者との共生を守り継承していくことを希望し、変えないこと変えていくことを明確化したいと思っている。法人事務局と大学とともに、次の時代の保育を園舎建て替えの課題を含めて具体的に考え動き出していく2020年度とする。また本年度は、ホームページも刷新し、建学の精神・かえで幼稚園の保育（東洋英和の保育）をより広くよりわかりやすく伝えるための広報に力を入れていく。

大学付属園として、大学の教育との融合・先生方との協力体制をより一層深め、保育の研究も深めていきたい。一方、教育実習を通して、希望と使命感を持つ保育者の養成に携わっていく。

2. 各部の環境整備計画

(大学)

建築・設備改修については、前年度に続き9号館教室棟において、建物の防水改修と空調機更新をセットにして実施する。雨漏りが激しい中央館の大屋根の防水改修も実施する。

省エネ工事の一環として、教室の照明LED化を実施し、電気料金の節減を図る。また、内装および空調設備の老朽化が激しい4号館会議室を防音性能の向上を兼ねて改装する。

IT化改修については、学生用PCの更新、コンピュータールームの更新、事務システムサーバの更新を実施する予定である。

(中学部・高等部)

先進的な教育の実現を目指して、西棟3階北側のリノベーションを行う。現在の社会科教室と仮ICT支援室（史料室）を改築して、マルチラーニン

グに適した教室を2教室（仕切りを外せば1教室になる）に改築し、ICT教育や対話型授業などの多様な形態に適した教室に造り変える。また316教室に、海外留学支援室とICT支援室と共存させつつ、社会科史料室も新設する。両支援室を中学生と高校生が活用しやすい校舎中央の場所に移設することで、生徒のICT活用やグローバル活動の拠点として活性化を図る。

コンピュータ教室PCと教師PCの更新はWindows7から10に対応するために必須である。また、学校運営システムで残っている部分を構築する。保護者からの学籍情報入力の仕組みと保護者アンケート機能を追加して、学校事務作業の効率化を図る。

中高部教員の時間外勤務軽減を目指して、教員と職員の連携と分担を進めたい。そのためにも専門性の高い校務に職員の配置を検討し、教員が生徒に向かい合える時間の確保し、教育の質を高めたい。

また、不登校生徒、家庭環境・人間関係で不安を抱える生徒の増加に対応するために、非常勤でスクールソーシャルワーカー（SSW）の採用を実施したい。現在は、常勤のスクールカウンセラー（SC）がいるが、学校だけの支援では難しい生徒も多数おり、内面的な支援とともに、社会のサポート施設との橋渡しによる環境的な支援の両方からアプローチしていきたい。

（小学部）

- ① 各教室に設置されている電子黒板を用いて、「デジタル教科書」を併用した授業を進める。また、体育館にも電子黒板を追加設置し、美術展等の学校行事にも活用する。
- ② 災害備蓄品の内容を大幅に拡充する。2019年度から装備品の見直しを進めており、現状に適したものを整え災害時に備える。
- ③ 講堂内の室内換気や除湿の改修を行う。さらに、舞台に設置されている各種幕を新調し、児童や保護者、来校者、教職員の健康管理に対処する。

（東洋英和幼稚園）

経年劣化や近年の異常気象や地震などに対し、園舎の安全点検をこまめに行い、怪我や事故の予防に努める。天窓の飛散防止などのさらなる強化を進める。

六本木再開発による園舎建て替えも含め、幼児の心身の育ちに適した環境整備や保育内容の検討を継続して行う。

（大学付属かえで幼稚園）

中長期計画の中には園舎建て替えという課題があるが、まずは今現在の子どもたちと保護者および保育者の安心・安全・健康・保育の質が守られるよう、環境の整備と設備の充実等を図る。2020年度は、隣家との間の土止めや、門扉の整備、劣化した外壁の塗装などを予定している。

3. 学院全体の管理運営計画

5年を対象期間とした中期計画の策定により、本学院の中長期課題、目標を全教職員が共有し、学院全体が一体となって課題に取り組むことにより、本学院の使命達成に取り組む。また、定期的に計画の達成状況を点検、評価を実施することにより、適切な進捗管理を行っていく。

本学院の各部門が上記の教学計画、環境整備計画を円滑に実施できるよう、法人事務局および各部事務部門において、以下の課題に重点を置き取り組む。また、法人事務局は学院本部としての収集機能、企画調整機能の強化を引き続き図っていく。

(学生・生徒募集)

- ・厳しさを増す学生・生徒募集環境に対応し、学院各部の関係者との緊密な連携のもとで、効果的な募集・広報活動を実施する。

(広報、学院関係者との連携強化)

- ・広報活動や東洋英和楓の会の運営を通じ、全ての学院関係者と学院との連携を引き続き強化する。

(財務運営)

- ・近時の金融情勢に鑑み、受取利息・配当金の確保を念頭に資産運用方針を見直し、同時にリスク管理の体制強化を行う。また、志願者動向や教育政策等、学校経営を取り巻く環境変化を先取りすべく、戦略性を持った寄付金募集拡充など財務基盤の一層の強化を図る。
- ・法令、規程に基づき適正に事務を遂行し、特に補助金、科学研究費など公的資金を財源とする研究費について、法令等に基づき適切な管理運用を図るため、監査体制を適切に運営する。
- ・取引先との既往契約を合理性・効率性の観点から見直し、大口契約を中心に競争見積り合わせを実施することにより、予算の適正かつ効率的な執行を図る。

(組織・職場運営)

- ・教職員が一段の能力向上を図り、働き甲斐を感じることができるよう、良好な執務環境の確保にあたる。また社会全般の雇用状況を踏まえつつ、処遇の改善に引き続き取り組む。
- ・改正私立学校法により強化された学院監事の職務遂行を円滑化するため、

必要なサポートおよび検討を行う。

(自校史関係)

- ・本学院が保有する史料を活用した展示を充実させるとともに、保存活動を推進する。また、広く学内外の研究機関・研究者等に資料提供を引き続き行い、社会貢献を果たす。

(六本木五丁目西地区市街地再開発、キャンパス整備)

- ・本学院は2008年以来六本木五丁目西地区市街地再開発準備組合に加盟し、将来的な学院の施設検討の一環として、再開発計画の検討に参画してきた。当初は、大学の六本木移転を前提とし検討を進めていたが、学院を取り巻く環境変化を受け、2018年11月30日の理事会において以下の方針を決定した。

(1) これまで大学の横浜校地から六本木校地への完全移転を前提に、六本木五丁目西地区市街地再開発事業に参画する方針の下、計画の検討を進めてきたが、2018年6月に公布された東京23区内所在大学の定員増加抑制のための法律および政令に照らして本学院の大学移転が困難であることなどに鑑み、当面大学の移転は行わない。

(2) しかしながら、同再開発事業の実現は東洋英和幼稚園、小学部をはじめ、六本木校地各部の教育環境の改善・向上につながるものであり、また当地域における学院と地域社会との密接な関係等も踏まえ、本学院として同再開発事業に参画する。幼稚園、小学部の再開発地域内における新校舎・園舎の建設に向け、必要な計画策定を推進する。なお、開学30周年を迎える大学については、施設の整備をはじめ、その魅力度向上のために必要なプランを今後速やかに実施していく。

- ・今後は、東洋英和幼稚園、小学部の再開発地域内における園舎、校舎の新設などを通して、教育環境のさらなる改善・向上を実現するため、計画の具体化を関係者とともに進めていく。

- ・横浜校地に所在する大学施設の整備、リニューアルを図るため、具体的な計画の策定を開始、実施していく。また、竣工後30年を経た中学部、高等部校舎のリニューアルについても、中高部と連携しつつ実施に向け取り組む。大学付属かえで幼稚園の園舎の将来計画についても、大学とともに検討を進める。

以上